

概要

- 「ピオーネ」は県下全域で広く栽培されている、本県のぶどう主要品種である。生産量は全国第一位であり、品質は高く評価されているが、近年、夏季の高温により着色不良となる事例が増えており、着色向上対策が強く求められている。
- 令和4年に天然型アブシシン酸含有の植物成長調整剤（S-ABA液剤）が登録され、県農業研究所で「ピオーネ」に処理した場合の着色向上効果、効果が高い使用方法、また、使用の際の注意点が確認された。
- 県内各産地で着色向上対策としてS-ABA液剤への関心が高く、使用に際し早急な指導が求められることが予想されたため、令和5年に全ての普及指導センター（9か所）の普及指導員、農業研究所研究員、革新支援専門員から成るプロジェクトチームを設置した
- S-ABA液剤処理による着色向上効果がすべての実証ほ場で認められた。同時に使用の際の注意点が明らかになり、今後の普及指導の方向を提示することができた。

具体的な成果

1 果皮色の向上

- 果皮色が**カラーチャート値において平均1.7向上した。**
- 果皮色の向上により選果の階級が**一階級向上した。**

2 果実品質への影響の確認

- 糖度、食味への影響は認められなかった。
- 果肉がやや軟らかい傾向があった。

3 注意点の把握

- 適量を細かい霧状で散布する。
- 適正な樹勢と着果管理を前提として処理を行う。
- 適期に収穫するよう留意する。

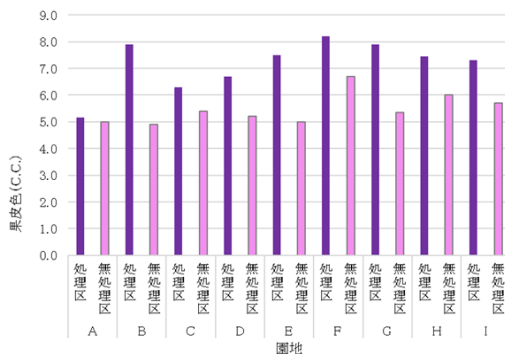


図1 S-ABA処理が「ピオーネ」の着色に及ぼす影響



図2 S-ABA処理を行った「ピオーネ」の果房

普及指導員の活動

令和5年

- 革新支援専門員がプロジェクトチーム設立をコーディネート
- **天然型アブシシン酸（S-ABA）による「ピオーネ」着色向上の実証ほを9か所設置**
- プロジェクトチームがプロジェクト課題推進会議を開催し、実証結果や産地の取り組みの**情報共有と今後の課題を検討。**

普及指導員だからできたこと

- ・ 農業研究所、全農、製造メーカー関係者と情報共有し、各産地において現地実証をすすめた。
- ・ 県内全域で連携した実証を実施し、気象や栽培条件が異なる生産現場で使用した場合の効果や注意点を把握することができた。このデータを基に今後の普及指導の方向を提示することができた。

ぶどう「ピオーネ」の着色向上対策

活動期間：令和5～6年度

1. 取組の背景

「ピオーネ」は県下全域で広く栽培されている、本県のぶどう主要品種である。生産量は全国第一位であり品質も高く評価されているが、近年、夏季の高温により着色不良となる事例が増えており、着色向上対策が強く求められている。

令和4年に天然型アブシシン酸含有の植物成長調整剤（S-ABA 液剤）が登録され、県農業研究所で「ピオーネ」に処理した場合の着色向上効果と使用の際の注意点が確認された。

現地で着色向上対策の要望は強く、使用が急に広まることが予想される一方、県内の気象条件や作型が異なる条件で使用した場合の知見が不十分なため、県下全ての農業普及指導センターと農業研究所果樹研究室、革新支援専門員が連携してプロジェクトチームを発足し各地で実証と調査を進めている。

2. 活動内容（詳細）

令和5年度

- ・革新支援専門員、普及指導員及び農業研究所の研究員からなるプロジェクトチームを設置した。
- ・農業研究所において明らかにされた、効果が高い散布時期、処理液濃度、散布量での実証を現地（全普及指導センター管内：9か所）で実施した。
- ・S-ABA を散布した処理区と無処理区の果実品質を収穫期に調査するとともに生産者、JA 担当者の意見を聞き取り調査した。
- ・プロジェクトチーム会議において各地の結果を報告し、生産現場で S-ABA 処理を実施する際の注意点を明らかにした。
- ・プロジェクトチーム以外の全農、産地の代表者が集まる果樹研究会、製造メーカーと情報交換を行い、産地の現状の把握と今後の課題について共有した。

3. 具体的な成果（詳細）

- ・収穫期の果皮色を調査したところ処理区は無処理区よりカラーチャート示度の平均が 1.7 高かった。
- ・糖度、食味は、処理による差は認められなかった。
- ・果肉の硬さは、処理区の方がやや軟らかい傾向はあったものの、適正な範囲内であった。
- ・果粉溶脱は、約半数の園地で処理区の方が多く認められ、症状は細かい霧状の溶脱であったが、等級が大きく低下するようなものは認められなかった。

- ・晩腐病が発生したほ場があったが、いずれも軽微で区による差は認められなかった。
- ・葉には処理による影響（黄化、変色等）は認められなかった。

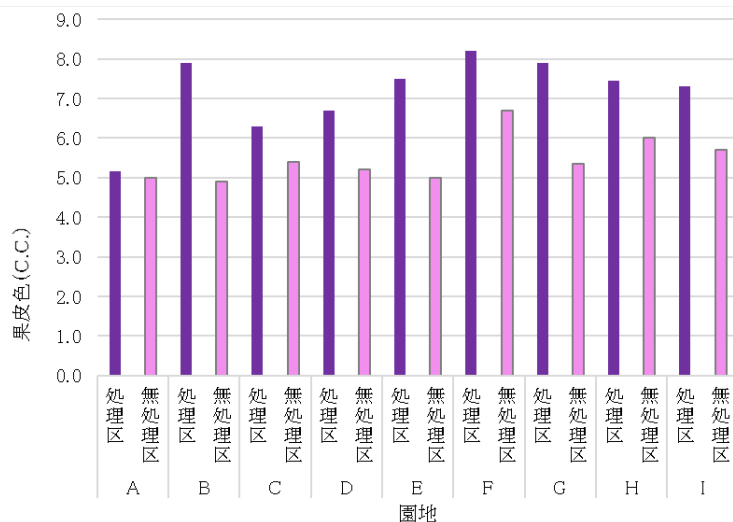


図1 S-ABA処理が「ピオーネ」の着色に及ぼす影響



図2 S-ABA処理を行った「ピオーネ」の果房

4. 農家等からの評価・コメント (各実証農家・JA担当者)

- ・着色は向上したとの感想が多く、選果の階級は平均して一等級の向上効果が認められた。
- ・食味は全体的に大きな差は認められなかった。ただし、一部の生産者で慣行区との違いを指摘する意見もあった。
- ・果肉の軟化は若干感じられたが、特に問題となるほどではなかった。ただし、収穫後に数日置いた場合に日持ち性の低下を指摘する意見もあった。
- ・果粉溶脱や汚れが認められたものの、等級が下がるほどではないとの意見が多かった。
- ・処理した果実は着色や果肉軟化の進行が無処理と異なることから、収穫適期の判断に留意するべきとの意見があった。
- ・処理にあたっては、むらなく丁寧に散布する必要がある、また、袋掛けの時期が処理時期より早い場合には、袋のかけ外しの作業が必要である等、処理の手間を嫌う意見が多かった。
- ・処理にかかる労力と着色促進効果を比較検討し、総合的に S-ABA 処理が有利か否かの判断については、各経営体の作型や労働力、着色向上の程度により分かれる結果となった。

5. 普及指導員のコメント（勝英農業普及指導センター 主幹 小林一奈）

- ・管内実証ほのピオーネは、例年、果粒肥大が良く、着果量を減らしても高温のため着色しにくかった。S-ABA 処理を行ったところ、着色促進効果が認められ、選果の階級は1等級以上向上し、販売単価が向上した。処理による悪影響は認められなかった。
- ・着色向上対策を求める生産者は非常に多いものの、現在の作業体系では処理適期に作業時間を割くことができないという意見が大半であった。
- ・適期収穫に努めるよう使用の際の注意点を周知することが重要である。
- ・県内全域で同時に実証を行い、情報共有できたため、効果と注意点を早く的確に把握することができた。

6. 現状・今後の展開等

- ・現在の県内の簡易被覆栽培作業体系では、袋掛け後に処理適期となるため、処理の前に袋を除去、処理後にかけ直す作業が必要となり、作業労力が大きく増加する。
- ・適正な樹勢と着果管理を前提として処理を行い、適期に収穫する等、使用の際の注意点を周知する。
- ・着色向上効果を継続して確認するとともに、作業性を検討し、果実品質や日持ち性、作業性への影響を検証し、産地への当技術の普及性の検討を継続する。